

## ハーディとロレンス

丹 羽 千 年

*From Shakespeare to Hardy* とか *Beowulf* から *The Dynasts* に至る思潮とか、ハーディが英文学史上一つの区切りと見られ易いのも彼の小説活動が十九世紀を以て終り、「ディナスツ」が第一次大戦前の雄篇である事からも当然と考えられ、ヴィクトリア朝の文学、社会に対する反抗の諸要素を有し乍らも、第一次、第二次大戦を経験した現代英文学に比して、或る古めかしさを感じさせるのも亦否定出来ないであろう。然しその反面、例えば *Henry Reed* がその *Novel since 1939* の中で現代小説の背景に三人の小説家の存在を指摘し、ハーディは悲劇的な深み、構想感、及び小説に詩的要素を与えた意味に於て、*Henry James* は複雑な筋を作つてそれを解いて行く楽しみを示し、深みのある散文と、凶悪恐怖嫌悪を通じての無量の道德観の点に於て、*James Joyce* は *Finnegans Wake* に於ける表現技術の面、*A Portrait of the Artist as a Young Man* に新進作家へ大きな刺戟を与え、*Ulysses* は小説発展の頂点を示す作品として、挙げている。この事は夙に R・F 氏によつて「英語青年」九十四巻四号に紹介され、又「英文学」(朝日新聞社刊)にも言及されている所である。或はハーディの詩について、“He fumbles, but it is that very fumbling that brings him so near to ourselves…… And they admired, I am sure, this clumsiness of Hardy’s not for itself, but for the touching and expressive use he made of it. For all that, Hardy was more important as an influence on the ‘new poetry’ than, say, Kipling…… and what poetry needed, in our time, was to recapture the thoughtful,



hesitant note.” (*The Modern Writer and his World*. G. S. Fraser pp. 303-304) とも見られる。更に A. J. Guérard は *Thomas Hardy: Novels and Stories* (1949) に於て、従来のハーディ批評家は Lionel Johnson (1895) から Lord David Cecil (1946) に至るまでの一つの“世代”に属していたが、この世代は我々の世代ではないとし、彼らが不安に感じたもの、即ち “…… his use of melodrama, his occasional later ‘ nastiness ’, his grotesque and macabre deviations from the placid reality they saw ” に於て却つて彼の長所を認め “ But we now accept Hardy’s extreme conjunctions, in the best novels at least, as highly convincing foreshortenings of the actual and absurd world.” (p. 2, p. 3) と述べ、Conrad と Gide と共にハーディの再評価を提唱している事はハーディ批評史に於て新しい見地を示するものとして注目されていく。然し、只二三の評者の言を以て現代英文学におけるハーディの影響、意義を誇大視する事は全体の系譜から考えて、牽強附会の誹を免れないであろう。此処では只異質的な強烈な個性の作家 D・H・ロレンスの “Study of Thomas Hardy” を中心として両者の関連を眺めて見たいと思うのである。

この “Study of Thomas Hardy” は F. D. McDonald に依つて編輯された *Phoenix* (1936) に収められているが、それより先一九三二年に発表されたのはその中の一章 *Containing Six Novels and the Real Tragedy* に過ぎなかった。発表されたのは孰れにしても彼の死後であつたが、彼が之を書いたのは、第一作 *The White Peacock* (1911) に続いて *The Trespasser* (1912) *Sons and Lovers* (1913) を発表し、次の *The Rainbow* (1915) の原稿を書き直していた一九一四年七月からその年の末にかけての事である。Aldington の伝える所では、当時別の小説のテーマを探していたが早速には無さそうなのでハーディについて書こうと決心したのである。( *A Portrait of a Genius*, but p. 154) その間の消息については *Phoenix* の序文に引用された手紙によつても知る事が出来る。その中でも九月五日には “What a miserable world. What colossal idiocy, this war. Out of sheer rage, I’ve begun my book about T.



Hardy. It will be about anything but T. Hardy, I am afraid — queer stuff — but not bad.”と自信の程を示し、十一月十八日には “I'm finishing a book supposed to be on T. Hardy, but in reality a sort of Confession of my Heart.”と書いている事はこの「ハーディ論」の特異性を物語るものである。

然しこれに入る前にハーディとの著しい類似点を挙げなくてはならない。先程のリードの所謂詩的要素と併せ考えられるのはロレンスの小説に於ける風景描写の巧みさである。第一作「白孔雀」に於て、すでにその風景描写が注目された事は、丁度ハーディが処女出版小説で自然描写に優れている点を認められたのに似ている。例えば第二部第二章 *A Shadow in Spring* の古ぼけた教会とそこに点出された孔雀。森番の死とその葬儀——早春の太陽が花々に映えて小さな花の太陽が紅い光に明け初める様、その色とりどりの野原を白木の棺が静かに進むにつれてエルムの花が同情にさやく如く、エルムの枝が鳴りそよぐ様、第一部第六章 *I was born in September* ——に始まる一節、或は、長く尾を引いて風が森を渡る音、家の近くの楓や柏の啜り泣き呻く音。風が水面にさらさらと小波を立て、小石の間にふつふつと騒ぐ様を描いた二章の冒頭など其処に鏤められた美しい描写の数々は生々として清新な印象を与えずにはおかない。と同時にハーディの *Desperate Remedies* 九の二の同じく縦の梢を渡る風の描写或は *The Woodlanders* にある森と風、マーティ・サウスの植樹の場面を想起させるである。オールディングトンが序文に “At the first attempt he equalled — some think he surpassed — his master, T. Hardy, in just such passages where Hardy was thought to be inimitable.”と書いているのも充分首肯出来る所である。

更に「侵入者」二章の冒頭にシーグムンド愛用のヴァイオリンが彼の死後暗闇の中に置かれたまゝ、弦が一本一本切れて行く、その切れる音も誰に聞かれる事もなく、黴の匂がかすかに木部を蔽い、絹の布に包まれた中に切れた弦がちびこまつて、ヴァイオリンにしみついたシーグムンドの匂そのものも黴の匂に段々変つて行く様、或はヘレナの腕に残る日焼けも象徴的である。そう言えばこの二人が “passionate but not satisfactory love-making” の数日を過した



Isle of Wight すら甚だ象徴的である。——二人を包む濃霧、二人の上に没するが如く思われる太陽、波間に黄金の液をふりそそぎながら出て、やがて空虚な弱々しいものになる月——それらは二人の感情を事毎に反映しているかに見えるが、このワイト島の背景はこの小説には欠く事の出来ないものである。オールディングトンはやはりその序文に、“Now, Lawrence had stayed on the island in August of 1909, and its beauties had made so deep an impression on him that you might almost say that the Isle of Wight is the ‘hero’ of the work. It means almost more to him than his characters — that ‘spirit of place’ he has interpreted with such beauty and variety.” と言っているが、そこにハーディの小説にある背景を聯想している事は疑ない。何故ならロレンス自身、前述の「ハーディ論」の中で *The Return of the Native* の悲劇を説明した後、ユースティシアやワイルディープは死んだが、それが何であろう。本元の衝動的な肉体であるエグドンヒースは、縦令人間の意志が花を蕾のまゝに繰返えし破壊しようとも、生まる可きものは永遠に生み続けるであろうと言つてハーディ小説の中に現れる啓示として活力のある生々しい大きな背景の存在を説いているからである。それは其処に蠢く人々よりなお大きい。暗い情熱的なエグドンヒースはもとより、森林地の葉蔭の水々しい情熱と感情 (*The Woodlanders*)、或は測り知れぬ星の世界 (*Two on a Tower*) 等——人智を以つて掴み得ぬ永遠無窮の原始的道德の広大なる模様の上に、人間の道德生活や苦闘、隣れな滑稽とも云えるさゝやかな人生の織りなす小さな模様が描き出されるのである。法律と秩序の小屋にも似て索莫として法外な自然から己を守る城壁都市、その都市の法を負うたまゝ出んとする先駆者達は、その城壁都市に説きつゝ、しかも荒野に臨みつゝ、自由にしてしかも拘束されたまゝ死んで行く。人生そのものゝ広大な窮められざる道德性、所謂自然の不道德性が久遠の謎の中に我々を圍繞し、その只中に小さな人間の道德劇が奇妙な枠の中で機械的に繰展げられる。この小さな舞台に倦み厭いてふと外を垣間見て、周囲に荒れ狂う広野を眺める。かくて彼は死に、彼の小さな劇は崩壊し或は繰返えされるばかり。だがその外の途方もない大きな劇場は不可解なドラマを続けて行く。之こそハーディの小



説の素晴らしさであり、そこに皮肉、挑戦、輕蔑を湛えている。そこにこそシェイクスピアやソフォクリーズ、トルストイと相通するものがあると認めている。恐らくロレンスのこの共感がワイト島を背景に置かしたと考えられるのである。只、例えばエグドンヒースの荒涼として永劫無窮、人を抑圧し、その運命を左右する如き重々しさに比して、ワイト島は誠に異つた様相を帯びていると言わねばならない。——時には二人をこよなく小さく見せるけれども、青空は海と互に明く笑いさぐめき、小さな入江をはさむ岬は水路を距てゝ雑談しあい、浜辺の玉石や小石も互に戯れ合つている。又、浜辺の熱い体に手を置いてまさぐりつゝ感じられる滑かな焼けた小石の不思議な驚異、腕を入れるとその熱さの底に感じられる冷やかな深い量感、その冷い神秘さにも亦心をときめかすものがある。そして時には霧の精が二人を閉じ込めてくれる重い金色のカーテン、その外の事は何も考えないでおれる。——それは寧ろ二人のその折々の昂奮や失望、歓喜に感応する、明い、暗い、又色彩に富んだ多分に感覺的な背景なのである。

「ハーディ論」に現れたロレンスの見解によれば、総ての生物の終局の目的は自己達成、自己完成にある。自己が完成された暁には、夫々の実を結ぶのだが、その実が頂点ではなく、見事に開花するその花こそ窮局のもの、頂点になるもので、それより作り出される諸々の物ではなく、達成されたる真の自己こそ重要である。しかも自己保存の為の争が人生の姿であるが、この生存競争の為の凡ゆるもの、凡ゆる自己への権利が宛も外部的な力によつて与えられるが如く思い誤つている。実は我々の内部にこそあるので、*money-sickness* や *sex-perversion* の根元は人間の心の中にあつて、環境の中にあるのではない。自己自身を癒せと言う可きものなのである。何故なら我々は銘々がマラリアの巣窟たる沼であり、譬うれば、芯から腐つて行く、固く結んだキャベツの如きものであるからだ。只小さな安全をのみ求めて心地よく暗い蕾の中に閉じ籠つて、一方我々の心から腐つて行く結果になる。我々は小さな自己保全を突き抜けて更に大きい自己愛と戒心の為にドイツとのみならず、我々自身とも戦わねばならない（第一次大戦勃発の当時、ロレンスか後に



あれ程苦しむ又嫌悪した大戦を未だ軽く考えていた事を証する一つ。オールディングトンの伝記一五五―六頁。それは軍国主義やプロシアの軛から逃れる為の戦ではなく自己警戒の束縛から我々自身を取り戻す為の戦である。我々をして真に存在せしめ得ない臆病から我々を解放してくれるものなのである。然し己の生命を救わんとならば、先ずその生命を失わねばならない。それは丁度不死鳥が焰となつてその灰の中に再び生命を生ずるが如きである。

一応かゝる基盤に立つて見る時、ハーデイの小説はゴールズワージーのそれ程ロレンスに無縁のものではないであろう。尤も彼のゴールズワージー論には多分に感情的な面が含まれている事は異論のない所であるが (*Phoenix* の序文或はオールディングトンの伝記参照)。即ち、ハーデイの小説に出て来る人物は金や目前の自己保全には余り構わないで、殆ど総てが実在する為に苦闘しており、しかも実在への苦闘の主たる因子が *struggle into love, struggle with love* であり、実在への径路は愛のみであるからである。彼等は突然衝動的に行動する。蕾から突然開花し、固い因習から突き出て、固く結んだキャベツの状態から狂的に個人的なあるものに開く。金や社会的成功慾を有していない彼等だが、国家や社会の中に形成された更に大きな自己保全の觀念が相変らずつき纏つて、それを個々の人物は城壁を繞した都市の外、覺束ない外界に生きようとする人の様に突き破つて、恐怖の為、疲労の為、或は四圍からの攻撃の為に死ぬのである。換言すればハーデイの悲劇は多かれ少かれ先駆者ともいう可き人間が確立された因習という謂わば牢屋を逃れて自由に行動せんとして荒野の中に死ぬ事にある。即ち一人の人間の分裂——その社会の道德的にしろ實際的な形にしろ、社会から離る可からざる社会の一員としての彼、社会の因習は、彼の持つて生れた個人の欲望、それが正しくとも正しからずとも社会の因習を踏み越えてその埒外に踏み出さしめる欲望にとつては、正に牢屋に等しい本然の彼、その間の分裂である。ロレンスはハーデイの主要人物を「貴族的人物」と称している。しかも彼等は殆ど全部と云つていゝ程死なねばならない。貴族への偏愛を有しながらも何故この貴族に道德的に反対するのだろうか。彼の所謂貴族とは本当の意味で存在し、彼自身となり、自らを創造し、彼自らとして生きる事が出来る位置にあるものなのである。それこそ貴族の永遠の



魅力と言う可きなのだ。人類の栄光は生命を創造する事、生々とした独立した個性的人間を創り出す事であつて、例えば家を建てたり、技術の仕事、芸術を創り出す事或は社会公共に尽す事で事ではない。安全に安樂に法律に安住する市民ではなく、一般大衆と孤立してしようと、もつと立派な判然として際立つた個人。かゝる人物を勿論芸術家は選んでゐるのだが、ハーディにあつては凡俗ならざる個性的人物は何故に何時も死の宣告を与えられねばならないか。この様な人達はその中に死の萌芽を持つてゐるのか。それともハーディ自身ブルジョワ的な所を持つていて、一般大衆が貴族を圧する様になつたからとて、復讐を遂げようといふのであろうか。ロレンスは明かに両者とも正しいと考える。ブルジョワ的道德性に始まつて、初期の作品では例外的個性的人物は悉く悪党とし、その特性を弱点乃至は大きな欠点として考へており、後期の作品に至つてこの見方が弱まつてゐる。ユースティシアに対して始めてブルジョワ的、一般民衆的道德性を克服し真の同情を表しており、特にジュードに至つて所謂 *Virgin Knight* と *Dark Villain* とが結合して最も完全な悲劇の主人公が見出されるのである。然しハーディはトルストイと同じ様に、結局、社会大衆の立場にあつて貴族を非難する。彼には何とも致し方ないのであるが、この様な特殊に反対して一般の側に味方する——最後の判決に於て人性の、社会全般としての利害を代表して個性的人間の利害を排除する。しかも彼がかような立場をとる事は実は彼の意に反してゐる。何故なら芸術家は常に貴族に偏愛を持つからであり、彼自身の秘かな同情は常に社会因習に反する個性的人間に向けられるからである。従つて多少とも欠点の少い個性を創造して、彼の最高の目的たる充足を求めしめ、社会、或は彼の中にある社会性乃至は市民的觀念を具体的に表してゐるものに依つて破滅する姿を表現する。こゝよりハーディのペシミズムが生ずるのであるが、その為にはトロイ、クリム、テス或はジュードに明かなる如く、ある弱点、融通の利かぬ冷い氣持、社会への必然的な如何とも抗し難い執着を有する個性の人を選ぶのである。彼等は生れつき判然たる個性を有しながら、謂わば生命の流が弱い為に旧來の執着から離れる事が出来ず、彼を含む一般大衆から別れる事は出事ないのである。



ロレンスには、「息子と恋人」(七章)にある様に——ミリアムはかねて見つけていた野バラの茂みをポールに見せたいと思う。それが素晴らしいものとは知っていた。しかも彼がそれを見るまでは、彼女の魂の中へ入つて来ない様に思う。只彼のみがそれを彼女のものの、久遠のものにする事が出来る。——それ程 convincing な神祕的な力があるのである。

ロレンスが「ハーディ論」の中で最も大きく扱っている作品は *The Return of the Native, Tess, Jude* の三つであるが、如上の所論を根底として「ジュード」を如何に解しているかを調べて見たい。それは彼に依れば「ジュード」は「テス」の裏返しであるからである。即ちテスは彼女の中に male と female と二つの principles が相争つてゐるが、ジュードはこの二つながらに持つており、アラベラはアレック、シューはクレアに等しい。アレックの場合ハーディは個人的信条により彼を咎めなくてはならない。従つてハーディはアレックを vulgar intriguer of coarse lasses として、又「滑稽な福音主義改宗者」として示す。然し彼は実は普通の「好色家」ではない。同様にアラベラも「福音主義伝道者」により改宗したが、彼等二人共ハーディが表現した程に浅薄な人間ではなかつた。クレア的な所のあるハーディはその粗野である事を理由に彼自らの復讐を遂げなくてはならなかつたのである。アラベラはその外見にも拘らず(豚殺し、附髪、粗野な言葉等は重要なものでなく、ハーディの bad art を示すものに過ぎない)幾分貴族的な性格を有する強い女性で、只その欠点は高慢にある。ジュードはテスの様に full consummation を求めるが、アラベラはアレックと同様 full consummation に反抗するものを持つてゐる。そして「男性」に接して享樂する事を求め、愛への利己的本能を、しかるにジュードは無私的本能を持つ。アラベラは彼の中に己を満足させるものを見出し、彼はアラベラの腕の中に成人、独立した大人となる(一の八、九、以下「ジュード」の相当する章を示す)。彼の勉学という目的にも勿論アラベラは賛成を示さず、書物、読書を嫌惡するのも当然である。然し彼の如き熱情的な感情的な男が学問の爲の学問、単なるアカデミックスに何の関りがあるうか。又彼女も一抹貴族性のある人間である以上、彼への権利はない



ものと感じ、彼の性以外には彼から何も享受する権利はないと思う。それはアラベラが自分を、男性と接する事により、男性に最も大きな恩恵を与えるあの *primary female* だと考えた為であり、かくて彼のもとを去り、二人別々の生活が始まる(一の十一)。ジュードがその際彼女に関わらなかつたのは、嫌つた為でも欺かれた為でも又失望した為でもなく、只勉強という考に憑かれていたからである。彼女の方でもそれはよく了解し許していた。無論彼女はある程度の満足を得ていたのだが、そのまゝ彼の許にいても、それ以上には何も得る所はないと知つていたからであり、アラベラ自身發展せざる者であつたからである。即ち彼を感覚に於て知つた時すでに彼の終末を知つたのだ。一方ジュードは事實彼女との結婚に無垢も信仰も希望も失つてはいないのみならず成人になつたのだ。かくて彼も亦發展せざる彼自身、機械的学究の徒になる事を決心したのである。今やジュードの望は肉体に生きる事ではなく、只精神性にのみ存在する事である。之が彼をして従妹シュューに赴かしめる(二の二、三)。シュューも彼と同じ様に部分的に、意識の中に、只心のみ生きる事を望む。感覚的經驗を望まず、只智識の面で知る事を望む。生れつき彼女には「生々した女性」は萎縮し、その意志も男性に近く、性のない、魔女型とも言う可き女である。シュューにとつて結婚は眞の結婚に非ずして服従であり奉仕であり隷属であり、彼女の女性精神は男性精神と結ばれることはない。従つて彼女がギリシア人の中に肉体的性質を探し求めた時それは彼女に知る事の出来ない肉体をも知識の一部としようという努力、肉体をも心の中に領しようという努力であつた(二の三、四)。現代文明の最高の産物の一つ、正に怖る可き存在であつたのである。精神的な働は敏活であり乍ら、結婚の肉体的性質は少しも考えずにフィロトスンと結婚したのも彼女の場合当然であつた(三の八、四の三、四)。シュューの中にある抑圧され萎縮した「女性」は烈しい怒りと同様そこに現存し致命的な過誤を犯す事を暗示していた。純粹にクリスチャンたる彼女が、アフロダイティ崇拜者となつたが、アフロダイティとは正に無縁のもの、所詮は *Venus Urania* (精神的恋愛の女神) であり(三の六)、その為にすでにシュュードと親しくなる以前に一人の男が死んでいる(三の四)。その萎縮した「女性」は、しかも尙肉体的男性を求めていた。彼女はシュュードをひきつける。



ジュードはアラベラとの経験も当座の間は「女性」から注意を逸らせてはいたものゝ、今やシューの中に「女性」を目覚める。この訴が彼女の方から来た時、彼の喜は大きかつたが、最初彼女の求めたものは彼の言葉を通じ、意識を通じて来るものによつて満足する事であり、彼も亦彼女に接した時、精神的には有能であつたが肉体的には不能者であつた。だからアラベラとの経験及びシューとの身の戦く様な親しみと灼熱する悟入の最初の経験との二つが相寄つて一人の花嫁となる可きものであつた。ジュードとシューとの結婚は彼が肉体的に知る前に既に終つていた。即ち彼女は肉体的に彼に与えるものは何一つなかつたからだ。その意味で「女性」との結婚など望んでいなかったフィロトスンとの結婚の方が彼女には正しい事であつた。フィロトスン——その中にシューが己の磔刑を完成した——の許を離れてジュードに赴く時、彼女は実は彼女の存在の神を見捨て、望みなき慾望の神に縋る事となつたのだが、やはり肉体のない精神的な結婚をする為だつた。ジュードが精神的な親しさのうちに満足出来れば肉体的接触なしにそのまゝ永続したであらうが、彼は男女の血や体の中に存在する未知の部分にまで深く浸透して結婚の完成を求める。アラベラを以前に知つていなければ、シューも彼を説いて、彼も亦肉体のない者と思ひこませ得たろうが、謂わば空高く星の近くへ昇つて行つて、其処で恐怖と空間の広大さに曝されながら戻れなかつたシューは、ジュードがアラベラをなおも欲している事を知つて、嫉妬から彼に肉体的に接近する事になる（五の一）。即ち、「I give in」というシューの言葉と共に彼女の破滅が生じたのである。ジュードの如き人間には、より深い宗教感から女と共に本当の意味での真の結婚の完成を見出して接する事が出来なければ結婚の意味はない。彼等二人はぎりぎりの最も深い感情の底で嘘をつく事は出来なかつた。しかも二人はそれが真の結婚でない事を知つていた。彼等が世人の非難を受けた時、彼等自身の罪の意識、対社会でなく彼ら自身の生への罪悪感の故であつた（五の六）。エセックス農芸展覧会で二人が見たバラの花こそ二人よりも更に実在するものを持つ。そのバラの美しさに真の結婚完成の象徴があつたのだが、現実の二人に返つて見れば、それは二人を導く鬼火の如くに見えるのである（五の五）。彼は意識に於て、彼女は肉体に於て、その生命を消耗して行く。そしてシューは女



であるという証拠に子供を産むが、“女性”でないが故にその子供は霜の如く消えて行かねばならなかった。彼の身体を弱らせ病気にしたのは石工の仕事ではなく、彼の肉体には最早や生命がなかったからである。一方シェーも肉体上の妻となり母となる時、自分の存在を断つ事になった。アラベラとの間の子供は継母シェーの結婚生活に偽りの非現実的調子を見、時代錯誤、致命的な事だと考える故に彼の弟達をも殺すに至るのである(六の二)。彼らの死体は瀆神の感で彼女の気を狂おしくさせる。聖霊への冒瀆である。今や無に帰したこれら生命の嘗ては脈うつていた苦痛と喜に罪を感じ、生れては来たものゝ、疫病の様にニヒリズムを拡げるばかりの死んだ子供達を生むという罪、この罪を犯した忌むしい肉体も罰として存在から姿を消さねばならないと思う。彼女はフィロトスンの所へ帰るといふ最も苦痛な贖罪の道を選んだのである(六の四、五)。最早やシェーは存在しない。シェードも彼女を救うには余りにも疲労困憊していた。彼女の要求は彼の与え得ないもの、恐らく誰も与え得ないもの、即ち肉欲を伴わぬ激しい愛であり、しかも自分の与えようと思う以上のものを彼から求めていたのである。シェードは死に向つていた、彼女よりも遙かに早く、彼女が彼に接した時にすでにそうであつたのである。

「シェード」の筋をこの様に辿つて来る時、ロレンス的な余りにロレンス的なと言わざるを得ないであろう。即ちこのロレンスバーションは自叙伝小説「息子と恋人」に於けるミリアム・クレアラ・テーマでなくて何であろう。同書二三八頁「君には信じられないのだよ。君には僕が丁度雲雀みたいに空に舞い上れない様に、君を肉体的に愛する事が出来ないということが信じられないのだ。」というポールの言葉。或はミリアムへの手紙(二六八―九頁)「あの愛の肉体は死んで、不死身の魂だけが残されたのではないでしょう。それは私は貴女に只精神的な愛を捧げることは出来る、これまで永い間そうして来たのですが、肉体的な情熱を与える事は出来なかつたのです。貴女は尼さんです。清らかな尼さんに捧げるものを、丁度神秘的な修道僧が同じ様な尼さんに与える様に――貴女に捧げて来たのです。確かに貴女はそ



れが一番いゝものだと思つてゐるのです。でも貴女はもう一つの愛のない事を口惜しく思い、いや思つてゐたのです。我々二人の間には肉体は入つて来ない。私は感覚を通して話せない——寧ろ只精神を通してしか話せない。だから我々は普通の意味で愛しあえない。我々のは普通に見られる愛情ではないのです。」——そしてこの手紙の一節はロレンスの詩“Last Words to Miriam”の中に最もよく現されてゐる——そう云つたミリアム。それに対して But then Clara was not there for him, only a woman, warm, something he loved and almost worshipped, there in the dark. The naked hunger and inevitability of his loving her, something strong and blind and ruthless in its primitiveness, made the hour terrible to her. (*Ibid.* p. 376) 或はポールをして、彼の感情があらゆるもの——理性も魂も血も——唯一つの大きな流の中に、丁度トレント河が音もなく、逆まき絡みあう渦を滔々と流して行く様に彼自身を運び去るが如く感じさせるクレアラ。そのクレアラともやがては離れて行かねばならない。

更にその前の作品「侵入者」の中で、幾分ミリアム的な影を有し、又クレアラとなり切る事も出来ないヘレナとのワイト島における数日の恋もシーグムンドは結局失敗と思わざるを得なかつたのである。それは時には母の子供に対する如く、その同情や親切さが彼の考えるヘレナとは全く違つた女にし、確乎として不滅で、脆い人間ではなく母性の化身の如くにも見えるのだが(九四頁)、結局肉体に於て consummation を持つのでなく、“She belonged to that class of ‘dreaming women’ with whom passion exhausts itself at the mouth. Her desire was accomplished in a real kiss. The fire, in heavy flames, had poured through her to Siegmund, from Siegmund to her. It sank, and she felt herself flagging.” (p. 35) であつたからである。

先にも挙げたゴールズワージー論で人間を、free human individual と social being とに別け、前者が宇宙の大きな連続の中にある事を感じるに反して、後者は分裂していると説き、ゴールズワージーの人物が後者に属してゐて、その上拝金主義に取り憑かれてゐるとする。しかも “Galsworthy had not quite enough of the superb courage of his



satire. He faltered, and gave in to the Forsytes. It is a thousand pities. He might have been the surgeon the modern soul needs so badly, to cut away the proud flesh of our Forsytes from the living body of men who are fully alive. Instead, he put down the knife and laid on a soft sentimental poultice, and helped to make the corruption worse.” (*Phoenix* pp. 542-3) とすら言う。或はフランクリンの中に、道徳的アメリカの最も道徳的ベンジャミン、健全にして満足せるベンを揶揄し、彼の信条に対してロレンス自身のリストを挙げてパロディとしている。又神祕的理想家メルビルのモウビーディックは神祕とこじつけの象徴を持った、最も奇妙な驚く可き書物の一つ、比肩するものなき海の叙事詩、深遠なる意義の通俗的象徴の書（同時に相当怠屈な）と考え、白鯨の中に白色人種の最も深い血の存在を、船に文明世界の象徴或は又白人アメリカの魂の船を見ているものゝ、それらに比してハーディへの深い興味と共鳴とは否む可くもない。恐らく只ウィットマンについて、その sympathy がキリスト教的愛と混同する事を責め乍らも、次の様に言っている時、最も大きな共鳴を抱いていたに相違ない。即ちホーソーン、ポー、ロングフエロー、エマースン、メルビルも感覚的に感情的に旧道徳を攻撃しながら精神的にはそれに勝るものを知らず、感情的に打破しにかゝつた旧道徳に固い精神的忠順を示したのであるが、ウィットマンこそ旧道徳への精神的忠順を破棄した最初の人である。人間の霊が肉よりすぐれた上位のものであるという旧道徳を打破した最初の人である、と。ロレンスの *Selected Essays* (Penguin) に附した緒言にオールディングトンは “As poet, basing himself on Hardy and Whitman, he kept vividly alive and honest an art which is dying out in a series of parlour tricks.” と述べている事も此処で附言するだけに止める。（尚、詳しくはオールディングトンの伝記四七頁参照）

然し、果してこの様な見方を許容するものがハーディの小説、特にジュードの中にないであろうか。例えば、W.

Rutland の *Thomas Hardy: A Study of his Writings and their Background* は幾多示唆に富む好著であるが、

“In these days, when the productions of D. H. Lawrence are easily accessible to every school child, it is



interesting to remember that, less than fifty years ago, this fate befell an author whose boots Lawrence was not worthy to lick." (p. 224) と言つたり、シューについての誤れる人物評として、"Perhaps the most notable panegyric is in the strange rhapsody by D. H. Lawrence miscalled 'A Study of T. Hardy.'" (p. 256) といつてゐるのは偏狭に過ぎると言わねばならないであらう。

「ジュード」出版の後ある友人に宛てた手紙の一節に、ハーディはシューの性的面について解明を試み、且つそれまでいふもシューは彼の興味をひいていた型の女であるが、この様な型を書く事が困難である為に今まで果せなかつたと述懐してゐる。その困難は勿論彼に内在するものではなく当時の社会にあつた事は彼の小説論、殊に *Candour in English Fiction* から充分に窺う事が出来る。更に、この小説はすべて対照である。即ち、Sue and her heathen gods set against Jude's reading the Greek testament; Christminster academic, Christminster in the slums; Jude the saint, Jude the sinner; Sue the Pagan, Sue the saint; marriage, no marriage; &c., &c. (*Life* II. p. 42) と説いてゐる。真摯であると同時に肉慾強きジュードを中心に教会による結婚と然らざる結婚の幸不幸の問題はこの小説の主要素となつてゐるのみならず、子供を死なせた後のシューの言葉 "We went about loving each other too much — indulging ourselves to utter selfishness with each other! We said — do you remember — that we would make a virtue of joy. I said it was Nature's intention, Nature's law and *raison d'être* that we should be joyful in what instincts she afforded us — instincts which civilization had taken upon itself to thwart. —" (pp. 404-405) 或は "O my comrade, our perfect union — our two-in-oneness — is now stained with blood!" (p. 404) 又ジュードが焰と燃え立つ熱烈な愛情のない事を責める時、シューの答えた言葉、特にその最後、—"But you see, however fondly it ended, it began in the selfish and cruel wish to make your heart ache for me without letting mine ache for you." (p. 422) それらは Sue the saint が過去を反省しての言葉であり、又シュー



の口から出た事は甚だ意外の感があるけれども、ロレンスの考を許容する余地を有している。然しそれは飽くまで許容するものを有しているものであつて、一致するものではない。

所詮それは両者の人生観、世界観の相違に基くものと言わねばならない。ハーディの小説中の人物をロレンスの人間の充足、完成、更に性を中心として *consummation of marriage* を目的とする哲学から見た場合の人間存在価値のズレであると言える。例えばアラベラ (アレック、トロイにしても) に幾分でも貴族性を認める事はこの性中心の哲学によつて見られた為と考えねばならない。この様にロレンスの価値観に基いて見られた結果とハーディ作品の人物の価値との相違から来るズレを彼独特のイグマにより逆にハーディの個人的信条により、例えばアレックを咎めなくてはならないとする。その上貴族に対する偏愛の例として、*A Laodicean* に例をとり、ポーラのド・スタンシイの家系に対する偏愛を挙げているが、同じ作品の中のデア自身の言葉に貴族に対する呪詛を寧ろ悲痛の気味を以て現していないだろうか (例えば四九一頁)。又そこに貴族偏愛という言葉の二重性が見られるのではないか。しかも作家的偏愛と作家として一般社会の側に立たざるを得ないそのキャップに彼のペシミズムの由来を求めているが、ハーディにペシミズムがあるとしても、その意味でのペシミズムではないであろう。

ロレンスは上述の事に関連して、ハーディが *Law* に対して反対しながらも、肉体的人物を悪党、だが弱い懶怠な悪党として現しているのを *Law* と *Love* の二つを調和せしめる事に失敗した為だと考え、彼のその失敗感を説明せんが為に、既に *The Return of the Native* に於て “There is no reconciliation between Love and Law. The Spirit of Love must always succumb before the blind, stupid but overwhelming power of the Law.” と、又更に早く、“That which is physical, of the body, is weak, despicable, bad.” という理論に到達していたのだとする。無論ロレンスにはかゝる哲学は馬鹿げたものである。従つて、「もし人間が思想よりも感情の面に於て強いといふのでなければ、ウェセックス小説は、事実一部に於て然りなのだが、全くの駄作に等しい。この様に考えれば、*The*



Well-Beloved は「ディナスツ」の概念の大部分がそうである様に、つまらぬ愚鈍の作。」とする。更に、「ハーディを考へる場合哲學者として考へる可きでない事は勿論であるが、その面では確かに見榮えがしない。彼の作品で事件を彼の人間についての理論に適う様に努め、(Law に対立する) Love の原理を表す人々に災難をふり被らせる不手際程憐れなものはない。彼のやり口は極めて拙く、無理がある為に形式は全く言語道断と言つてもよい位である。」と考へる。だが人間の本然の意志を阻むものは社会の制度、因習、既成宗教等の所謂環境、時にはその人々に内在する遺伝的性格ですらあるが、小説の世界ではそれらの背後に普遍的内在意志は只隴ろげに浮んで見えるばかり——我々は勿論「ディナスツ」に於ける形而上の世界の光を逆に小説の世界にあてる事によつて、その内容を早く割切つてしまふ危険は充分に警めねばならないが——「不条理」とでも言う可き外なるものと本然の内なるものゝ対立は今更述べるまでもないハーディの世界觀の必然性である。そして「ディナスツ」の最後に歌われた盲目意志の意識の覚醒への希望に調和が求められたのである。このハーディの「哲学」を Law と Love の調和の失敗という面から理解しながらも、之を否定排除し、そこに彼独自の「哲学」を適應するのであるが、その「哲学」を許容する足がりを何処に求めたのであろうか。「しかしその反面、彼の感情、本能、肉感的理解は彼の哲学と事違い非常に立派で、他の如何なる英小説家よりも深遠である。彼が人々の事を考へ、大地に向い、風景に対する際必ず出しやばらずにはおかぬ彼の哲学を除く時始めて彼は己に忠実なのだ。」とロレンスは言う。此処にロレンスがハーディに多大の共感を示しつつ、ハーディ論を展開し、更に彼自らの心の告白を述べている鍵がある様に考へられるのである。

一九一一年 Ada に宛てた手紙の一節“... However, it seems to me like this: Jehovah is the Jew's idea of God, not ours. Christ was infinitely good, but mortal as we. There still remains a God, but not a personal God: a vast, shimmering impulse which waves on towards some end, I don't know what — taking no regard of the little individual, but taking regard for humanity...” それは又「すべてのものゝうち最高なるものは暗闇



の中に融け込んで、そこにたゆたい大いなる存在そのものと一つになる事だつた」(「息子と恋人」三〇七頁) その大いなる存在、時には「海が一面白熱して燃え上り、その上にまるで神の火の青い煙の如く青空が蔽うて、ヘレナは白熱に燃え立つ神に面するが如く、思わず感謝の犠牲として我身を捧げる思いがして、神の火が聖霊の如く彼女にうつる」世界(「侵入者」一四八頁)、或は太陽によつて象徴される最も原始的な世界でもある。この宇宙と合一する手段を *two-in-oneness, consummation of marriage* に求めた。それは一人の男と一人の女ではなくその奥にある男性と女性との合一である。この様な両性の合一の姿は「ハーディ論」の中に芥子の花や、花における雌蕊と雄蕊、或は海に注ぐ大河の流の譬を以て繰返えし極めて詩的に説かれている所である。彼の所謂、*Law* と *Love* との調和合一への苦闘が彼の肉体の上ではなく彼の小説の中に行われている事を考えあわせれば、このハーディを契機とする彼の心の告白は彼の哲学の最も早い結実的な開花、初期作品の最も具体的な背景となつていゝと言つて過言ではない。

(尚、貴重な書物をお貸し下さつた益田道三教授に御礼を申し述べなくてはならない。)